

## 会 議 録

会議の名称		平成 30 年度第 4 回つくば市総合教育会議		
開催日時		平成 30 年 9 月 4 日（火）12 時 00 分から 14 時 30 分まで		
開催場所		つくば市役所 5 階庁議室		
事務局（担当課）		総務部総務課		
出席者	委員	五十嵐市長、門脇教育長、鈴木教育委員、小野村教育委員、柳瀬教育委員、倉田教育委員		
	講師	小宮山利恵子氏（リクルート次世代教育研究院長）		
	その他	中川 綾氏（一般社団法人日本イエナプラン教育協会理事）		
	事務局	毛塚副市長 《総務部》藤後部長、吉沼次長 《総務課》中泉課長、奥沢課長補佐、荒澤課長補佐、高野係長、東泉主査、渡邊主任、鈴木主任 《教育局》森田局長、大久保次長 《教育総務課》貝塚課長、吉沼課長補佐、笹本課長補佐、宇津野係長、青木係長		
公開・非公開の別		<input checked="" type="checkbox"/> 公開 <input type="checkbox"/> 非公開 <input type="checkbox"/> 一部公開	傍聴者数	18 名
非公開の場合はその理由		—		
議題		(1) 小宮山氏講演・ディスカッション (2) つくば市教育大綱の方針について（イエナプラン教育）		
会議録署名人			確定年月日	平成 年 月 日
会議次	1	開会		
	2	市長挨拶		
	3	講演 題目：人工知能（AI）時代の学び ～諸外国におけるテクノロジー活用現況について～		

様式第 1 号

第	4	講演を受けてのディスカッション
	5	協議事項 教育大綱の方針について（イエナプラン教育）
	6	閉会

<審議内容>

事務局：ただいまから平成 30 年度第 4 回つくば市総合教育会議を開催します。

開会に当たり、五十嵐市長から御挨拶申し上げます。

市長：本日は御出席ありがとうございます。今回は、リクルート次世代教育研究院長の小宮山さんにお越しいただきまして、ありがとうございます。「Mr. サンデー」という番組で先週から御出演されていて、「リバースマンターシップ」という言葉が使われていて、この言葉が公共の電波に乗ったのはおそらく初めてではないかと思っています。大変御活躍されている方で、日本のテクノロジーと教育分野で第一人者だと思っています。今日は人工知能時代の学びということで、諸外国の事例等を御紹介いただけることになっています。講演後にはディスカッションを行い、その後イエナプランについていろいろなお話ができればと思っています。また、今日は佐久穂町から傍聴にいらしているので、突然ですが後で一言いただければと思っています。

事務局：ありがとうございました。今回は最初に小宮山様の御講演をいただき、御講演後にディスカッションを行っていただきます。その後、通常どおり教育大綱について御議論いただく予定です。

それでは、御講演に移ります。御講演に先立ちまして、小宮山様の御経歴について御紹介します。小宮山様は、2002 年早稲田大学大学院を修了され、株式会社ベネッセコーポレーション等を経て、スタディサプリを展開する株式会社リクルートマーケティングパートナーズに入社されました。超党派国会議員連盟「教育における ICT 利活用促進をめざす議員連盟」有識者アドバイザーを務め

られ、現在は、リクルート次世代教育研究院院長や東京学芸大学客員准教授をされており、フジテレビ「Mr.サンデー」コメンテーターも務められています。本日、小宮山様には、「人工知能（AI）時代の学び～諸外国におけるテクノロジー活用現況について～」の御講演をいただく予定となっております。それでは、小宮山様、よろしくお願いいたします。

#### 小宮山氏の講演

- 1 リクルート次世代教育研究所について
- 2 世界の動き
- 3 必要な人材
- 4 海外における教育事情（エストニア、インド、中国、米国、フィンランド）

#### ディスカッション

市長：どうもありがとうございました。講演を聴かれて皆様、御意見や御質問があると思いますので、率直に対話しながら進めていきたいと思います。小野村委員いかがですか。

小野村委員：反転学習を家でやって来ない子どもに格差が生じないかということと、フィンランドでwell-beingが出てきていて、IT化の一方でそこがおろそかになっていないかについてお聞きしたいです。

小宮山委員：私も全く同じ疑問を抱いていて、「MIT だからできるのではないか」と質問をしました。一部分それは認めざるを得ないということで、反転学習は大学から始めて行って、だんだん下に降りてくる課程で、試行錯誤あり、事前に学習して来ない子どもたちはどうするのかという話がありました。アメリカの例で格差の話があり、テクノロジーを使って自宅で学んでこない子どもたちにやる気を起こさせようという取り組みがあります。IBMワトソン（チャットボット）を使用した反転学習の取り組みです。グレード8年の反転学習の事例として、科学で地球と月の違いについて、読解をした上で、チャットボットでAIを使って問いかけていく中で、分からないと答えるとヒントが出され、

理解が進むような示唆をテクノロジーがするというものです。子どもが「勉強するのが嫌だ」と入力すると、「僕も伴走するから頑張ろう」というようなテキストが出てくる。先生はどの子がどのくらい理解しているかをマネジメントシステムで分かるようになっていました。チャットボットという AI との会話が、今は大分改善されている。貧しい家庭の子どもや有色人種の子どもやマイノリティに対して行われており、まだパイロットなので、実装はされていないとのことでした。パーソナライズドラーニングはおっしゃるとおり、格差が激しいです。算数の代数が乗り越えられるかで苦労しているということで、代数ができると数学の習得がスムーズに行くが、そこでつまづく子どもが米国の各州において多いので、パーソナライズドラーニングで家において学習する、又は放課後学校に残って先生が補習をしていると聞いています。Well-being については、フィンランドは学習指導要領を改訂して、Well-being (安心安全な学校) を入れました。学習は勉強ではなく、楽しみながら学ぶものであると改めて考え直したということでした。フィンランドの教育大臣は「楽しいこと」(joy of learning)が重要で、その前提で積み上げが出てくるのではないかということでした。フィンランドの首相が「教える」(teach)という言葉は使わなくなり、「学び合う」という言葉が使われると言っていました。若い人からも学ぶことはたくさんあり、年を取っているからたくさん知識があるということではなく、お互い学び合うことが教育になっていくということでした。STEAM の分野では当たり前ですが、それ以外の分野でも当たり前になっていくのではないかと思います。

市長：鈴木委員いかがですか。

鈴木委員：子どもふたりが現役の中学生です。海外でこのようになっているのは何となく分かっているが、日本の現場とどう比べていいのか分からないくらいに違うので、どうマッチさせていくのかを考えあぐねているところです。individual education が進むと考えると、学校は何のためにあるのかと

というのが疑問なのですが、その点どうお考えですか。

小宮山氏：現場とどうマッチするかですが、期末中間テストを廃止した学校として、千代田区立麴町中学校があります。宿題も出していません。私も小学校 5 年生の子どもの親ですが、宿題がないという親として大丈夫かなと思うのですが、親のマインドセットも変えていく必要があると思います。本当に宿題は必要なのだろうか、テクノロジーを使って家でできるものがあれば、代替できるのではないかなどという考えが出てくると思います。学校の役割ですが、日本でアダプティブラーニング、パーソナライズドラーニングという学力の習熟度でしか話されないことが多いのですが、海外の場合は習熟度のほかに学習環境すべて含めたパーソナライズドラーニングの議論が多いです。みんないる中で学んだ方が学びやすいという子もいれば、ブースに一人籠って集中して学んだ方がいいという子もいます。そこの定義から整理が必要という話はあると思います。その上で、学校の役割はというと集団（グループ、チーム）で何かをするというのは、ネット上でもできますが、実際に顔を合わせるのとはやっぱり違う。VR で触覚や嗅覚があったりして、その人が目の前に感じられるようになれば変わるかもしれないが、現時点では直接対面して話した方が表情などで理解しやすい。その点で学校の役割としては変わらないと思います。もう一点、社会の中の組織としての役割がこれから大きくなっていくのではないかと考えています。

教育長：子どもを教育するのは何のためにやるのか。フィンランドでは子どもたちの well-being を高めるためにということが先行しているということでしたが、中国やアメリカなどでは国の発展を更に進めるために子どもの能力を高めるという形で教育しているように聞いていたが、その点はどうですか。

小宮山氏：おっしゃるとおり、産業と直結しています。IT 人材が足りないとなると STEM 教育で人材を育成しなければいけないという話になって、アメリカでも同様の議論があります。そういう話で予算をつけて STEM 教育に時間を割

いていいのかという話と、テクノロジーを使った個別習熟度別の学習ができれば、能力に凹凸があってもいいのではないかという議論があります。基礎学力はもちろん必要です。マンション 1, 2 階はコンクリート固めで重要なもの、いつの時代になっても基礎学力として変わらない不変のものであり、その上に積み重なる能力は実はプレハブとして考えた方がいいのではないかというのがあります。その時代時代に応じて、必要な能力は変わってくる。それに適応できる人を育てるのが学び、Well-being につながってくるのではないかという議論があります。STEM 教育が産業と密接すぎるので、異論を唱えている方々はいます。

教育長：つくば市では、どんな能力の子どもでも、その子の Well-being を最大限にするために教育する、という方向でこれから考えていきたいと思っているので、質問しました。

小宮山氏：すべての子どもたちが大学に行かなくてもいいかもしれません。高校卒業してすぐに働いてしまった方がいいかもしれない。グーグルの社員の中でも約 14%が大学卒業資格を取っていないと聞いています。能力、自分の学べる環境、働ける環境さえあれば、そこにすぐ飛び込んで行って、また改めて学術機関に戻ってくるのもいいと思います。大学卒業したら終わりではなく、ずっと学び続けていなければいけないという時代が来る。どういう風にその子にとっていい環境で学べるか、そういった環境づくりが教育の使命ではないかと考えています。

教育長：フィンランドでは「教える」が死語になるだろうということだったが、もともとは自ら「学ぶ」という言葉はあったが、「教える」という言葉はなかった。フィンランドがそういう方向に行っているというのはいい話だと思いました。

市長：これに関連して小野村さんいいですか。

小野村委員：フィンランドで Why や What を問わずに How というのは、少し怖

い。私たちは Why と What を考えるべきであって、ティーチングをしないで How が大事というのは矛盾しているのではないのでしょうか。

小宮山氏：確かに御指摘のとおり、少し矛盾しているところはあると思います。フィンランドでも試行錯誤していきまして、500万人くらいの小さい国であるが故に、起業家教育をもっと重視していかなければいけないなど、考えることが多すぎて、これからフィードバックを行って改善していかなければならないと言っていましたので、また変わるかもしれません。10年に1回の学習指導要領改訂ではあるが、社会のスピードが速いので、もっとスパンを短くして考えていかなければいけないという話がありました。How だけが必要だとは思っていないと思います。Why や What があつた上で How をこれからどうしていくかだと思います。

柳瀬委員：スキルなので、使い方によって新しい世界が開けるのだなと思いました。素晴らしいグランドピアノを持っていても、「猫ふんじやった」弾いていたら意味がないですね。技術の革新と使いこなす人間側が問題になっていると思います。教育の本質的な部分では変わっていないような気がしていて、どう使いこなすかということだと思うが、勘違いが多い。すごいお金をかけてパソコンを並べて「猫ふんじやった」をやっているみたいなものもある。それと比較すると、小さい頃からスマホを持っていて、それを上手に使っている子どもたちだけ、体系も大事にしているというのとは大きな違いあって、私たちもとんでもない勘違いをしているのではないかと思って、直さなければならぬと感じました。

小宮山氏：全国の学校に電子黒板はどの教室にも普及しているが、ある学級では時計があるのに、画面に時計を映しているだけというもったいないケースがあります。先日文科省に AI と教育について話をしたが、先生のマインドセットだけではなく、親御さんのマインドセットも変えていく必要がある。AI 脅威論ではなく、AI とどのように共存していくかと考えた方がエネルギーをあ

まり使わなくて済む。私たちが拒んでいても、テクノロジーはやってくるわけで、遅かれ早かれ教育の現場にもテクノロジーが入ってくる。そうなった時に自分たちの心構えをどのようなものを持った方がいいか、研修も含め文科省にお願いしたいという話をしたので、少しずつ変わってくるかもしれません。

柳瀬委員：ディストピア的な面も認識しなければいけないと思います。シンギュラリティの話で人間を超えと言ったけれど、大きな分岐点で逆に私たちが人間として存在しなくなる可能性があるので、ディストピア的な面への警告というのはされているのでしょうか。

小宮山氏：ありますね、テスラ CEO のイーロンマスクさんやホーキンス博士も AI の脅威論をいろんなメディアでお話しされていました。そのようなことも念頭に置きながら、GAF A (Google、Amazon、Facebook、Apple) と Microsoft が AI を使う倫理について話し合いを始めているので、民間、教育の AI 利用についても、これから議論が出てくるのではないかと考えています。文科省には、テクノロジーを教育で利用する上で、個人情報保護を含めてデータをどう活用すればいいかを整理してほしいとお話ししています。

市長：倉田委員いかがですか。

倉田委員：小宮山さんが教育環境の理想形と思う今の考え方をお伺いした。教員の役割、考え方に今まで見てきた国で違いがあるのかをお聞きしたい。

小宮山氏：個人的に考える理想は、Well-being。一人ひとりの子どもにとって、どのような学び方がよいのかが追求できるのが一番いいと思っています。私の子どもの話で恐縮ですが、小学校5年生の男の子で、スタディサプリを行っていますが、算数だけ得意で、中学校3年生の数学まで行っています。学校の算数が物足りず、自分には合わないとすごく退屈で、「他の子を教えてあげなさい。」と先生に言われるが、それも飽きてしまったということで、精神的に未熟なため飽きてしまうのが早く、そのような子どもにとって、テクノロジーが支援ツールになるといいと思っています。理念は、各国の思惑があります。フ

ilterターを通して見ないと難しいところはあるが、パーソナライズドラーニングができてくれば、それぞれの子どもに合った教育をやってあげたいというところが、キーポイントになっていると思います。教員の役割は、教員の職自体はなくなりませんが、ロールがどんどん変わっていく。学びあうことが多くなっていくことで、メンター、チューター、ファシリテーターの役割が大きくなっていくのではないかと。生徒を伴走して、時には励まして、時には慰め合って、グループディスカッションの場をファシリテートするという役割が、今後多くなっていくと思います。

市長：小宮山さんが話したスクール形式の45分とここでの30分間の議論は全然違った印象につながっていったのではないかと感じました。こういうことこそが我々の目指すことの一つだったと感じました。本当にお忙しい中ありがとうございました。

【小宮山氏 退席】

市長：ありがとうございました。「How」や「必要とされる人材」など引っかかるキーワードは大体同じだったかと思います。学びとは何なのかと根源から考えていくと話していく中でつながっているという印象を受けました。

今日はイエナプランについても議論していきたいと思います。前回宿題になっていた教員の自己肯定感などについて、教育局から報告してください。

教育総務課長：これまでの総合会議において、市長及び委員から確認を求められたものについて、その調査結果について報告します。

まず、「つくば市において、小中一貫教育を進めるにあたって、教育委員会において、どのような議論が行われたか？」についてですが、当時の会議録を確認したところ、平成19年10月の定例会において関係課内で協議が始まったこと、平成20年7月には報告案件として上げられ、翌8月の定例教育委員会において小中一貫教育にかかる議案を提出、承認を受けています。

教育委員会の定例会では、特に大きな議論はされていません。平成19年の学

校教育法の改正により、小中学校の教育課程について連続性をもたせたこと、こうした流れにおいて、つくば市でも小中一貫教育を推進することとして進められたもので、賛成・反対の議論にならなかったのではないかと考えています。続いて、「小中一貫の春日学園開校の経緯」についてですが、TX 沿線開発による人口増加、伴って吾妻小、葛城小、吾妻中、手代木中の児童生徒の増加が見込まれたこと、学区審議会の答申並びに検討会議からの報告もあり、春日地区に学校建設の計画、さらに小中一貫教育の推進という観点から施設一体型のモデル校として計画、平成24年度に開校しました。

続いて、「教師の自己肯定感にかかるデータについて」ですが、OECDによる国際教員指導環境調査で2013年調査結果を資料のとおりお知らせします。

教員の自己効力感は参加国平均よりも日本は低くなっています。

仕事への満足度については、平均を下回る傾向があるものの、おおむね満足はしています。仕事の時間配分については、通常の一週間における合計時間が53.9時間と平均の38.3時間を上回っています。とりわけ、課外活動の指導(部活)時間が他国より多くなっています。

続いて、「筑波東中で行われた生徒・保護者・教職員へのアンケート結果」についてですが、80%以上の生徒が学校を楽しんでいる。小中一貫教育の関連では、小学生との共同活動を80%以上が肯定しています。保護者に対する設問では90%以上が「子供が楽しく学校に通っている」と回答しています。教職員のアンケートでもおおむね肯定的な回答があげられています。

最後に、国が行った小学生・中学生の意識に関する調査結果です。全国の保護者2,487人、青少年1,404人を対象に行われました。その結果、保護者の学校教育の満足度は80%近く、青少年の学校生活の楽しさは96.8%に上っています。

市長：これについて質問はありますか。

(呼ぶ声なし)

市長：何かあれば、後で事務局に確認していただければと思います。

## 様式第 1 号

イエナプランについて、前回 DVD を全員が見てきて、それに関する意見共有ができていない段階ですが、日本で第 1 号のイエナプランスクール創設の準備が長野県佐久穂町で進められています。一般社団法人日本イエナプラン教育協会理事の中川綾さんが傍聴でお越しいただいています。みなさんに御相談ですが、10 月辺りにいらしていただけないかと勝手に思っているのですが、折角なので突然ですが中川さんに前にお越しいただいて、イエナプラン DVD の感想などを聞きつつ、質問など聞かせていただければと思います。

中川氏：こんにちは。はじめまして、中川綾と申します。リヒテルズ直子さんと 14, 15 年前に出会いまして、日本でイエナプラン教育を広げていくという活動をやってきました。東京に拠点があり、佐久穂町と行き来して日本初のイエナプランスクールの小学校（学校法人）を立ち上げて、長野県に申請中で認可が下りれば、来年 4 月に開校の予定です。

市長：どのような学校を目指されているのですか。

中川氏：先ほど Well-being の話がありましたが、理念としては、誰もが豊かで幸せな世界をつくるための学校というところで、社会に合わせた学校だけではなく、学校そのものが社会に出るための準備の場であると考えた時に、学校の中で理想の共同体がしっかりと作られ、経験され、そういう経験を持って社会に出た時に理想の社会をつくる人を育てられると考えてやっています。

市長：今の ICT の話をどう聞いていらっしゃいましたか。

中川氏：面白いなという部分とイエナでは実践されるだろうという部分と両方あると思っています。個の学びと協同の学びが毎日繰り返されて個の学びを協同の場でいかすという時間が多分にあるということが特徴です。異年齢の話があまり出なかったが、社会は異年齢で構成されているので、教室の中も異年齢であることは、人はみな違うという前提に立って学びの場ができると思っていますので、とても良いところだと思っています。合科について、私たちもカリキュラムを考えているが、教科を組み合わせることが合科ではなく、先生たちが

話していく中でつながっていく場ができるというのは確かにそうだと思います。イエナプランの職員室は対話をする場という前提で作られており、対話が自然と授業の中で行われることで、子どもたちにも伝えていくことが変化していくというのは、大事なことだと思うので、その意識は足りなかったかもしれないなと思いながら聞いていました。

市長：逆に違うと感じたところがありますか。

中川氏：Why と How の話の中で、どのように教えるのか、という点についてですが、「学び方を学ぶ」という話だと理解したのですが、先生は教え与える存在だけではなく、情報処理をどうしていくのか、学んだことをどう生かしていくのかなども含めて、どのように子どもたちが学ぶのか、という意味で使っているのかな、と良い意味で解釈をしようと思いました。

市長：学校の見学会はやられていると伺ったのですが、子どもはまだいないので、まだ学びがあるわけではないですね。

中川氏：まだないです。私たちは、寮をつくる気が基本的にはなく、小学生のうちから子どもと親が離れた生活をすることにあまりポジティブには思っていないので、東京から来たいとなると家族ごと移住が前提になってしまうので、ライフスタイルを変えるということになるので、現地の学校を見てもらって、移住先として良い場所なのかを見てもらうためにやっています。

市長：今のところ問合せなど関心の度合いはどうか。

中川氏：100 家族いるとすべてニーズは違うので、説明会は5組限定の小グループでやっています。現在20回以上やっていて、全部満席ではあります。

市長：定員はどのくらいの予定ですか。

中川氏：定員は1学年30人が6学年で最大180人です。教育活動については異年齢で行うため、1年～3年の各10人で3グループ、4年～6年で3グループできるという形です。

市長：一条校（注：学校教育法の第一条に掲げられる教育施設）ではないです

## 様式第 1 号

か。

中川氏：一条校です。一条校でないと意味がないです。イエナプラン教育はオランダだからできるとか私学だからできるではなく、基本的には学習指導要領下でできると考えており、公立学校・公教育の中にイエナプラン教育を広めるためのモデル校として第 1 号をつくるという意味合いもあります。

市長：ということは、公立でもできるということですね。

中川氏：絶対にいけます。一人で学校は作れないので、学校全体でどのようにするかということと、教員の権限をどこまで持たせるかだと思います。それを守っている行政がどこまで協力しあえるかというところで、先生たちが安心して学校づくりに取り組むことができるのではないかと考えています。

市長：せっかくの機会ですから、中川さんにちょっとお付き合いいただいて、御質問や DVD を見た感想等をシェアしていただきたいと思います。

教育長：私も 40 年前に全寮制の白根開善学校をつくることに力を尽くしたことがあります。学校をめぐる色々な法律があったとしても、新しい考え方で学校をつくることもできるという事例を誰かがやっていかないと、日本の教育が変わらないと思っていました。少子化で児童生徒は少なくなり、現在は 40 人しかいなくて、経営にかなり苦しんでいるが、イエナプラン教育を長野県で始められるというのは同じような試みで、共感して聞いていました。柳瀬委員は 7 年間その学校で頑張っているのです、その経験を話していただけますか。

柳瀬委員：白根開善学校では、成績は文章で書く、テストはしない、総合学習的なエポック授業という 2 週間続けて午後の時間帯でテーマ学習する等、教育課程を焼き直してやっていた。読み書き算術は、午前中のクリアな時間帯に 30 分ずつやって教科関係なく先生が入って 4、5 人の子どもたちを見るという共同体的な学校を作りながらやっていた。規模は 100 人超えると生徒と先生の 1 対 1 の関係が崩れてしまう。先生が子どもたち全員のことを理解して、子どもたちも先生全員を理解するという関係が、100 人超えると少し崩れ、150 人の

## 様式第 1 号

時期は努力しないとお互い理解できなかつたので、規模というのは大きかったと思う。全寮制だったので、生活のサポートをしていました。移住は地域起こしとなると大きなチャレンジだなと思い、つくばでも北部にたくさん廃校があるので、できるといいと思いました。

中川氏：廃校になった小学校を使わせてもらうので、学校が地域の中心にあり、すごく愛されていた学校だったので、当初、反対される覚悟もして説明会などに向かいましたが、とても応援していただいております。すごく愛してもらって、応援してもらっています。学校を起点としたコミュニティづくりは私たちもしていきたいと思っていて、本物から学んでいくことや外に出て行って子どもの様子を見てもらうなど地道なところから、ゆっくりゆっくり新しいコミュニティになっていくのではないかと思います。文化を引き継いでいくこと、改革していくことは両方必要だと思うので、ゆっくり実現できると良いと思っていて、佐久穂町はそれができそうだと思うところですよ。

市長：なぜ佐久穂町だったのですか。

中川氏：佐久穂町は、阿部守一長野県知事が新しいオルタナティブ教育に力を入れているというところもあり、東京はもう私学が多すぎて新たに作れないので、長野県の方に相談したところ長野県の廃校をたくさん御紹介いただいて、東京からのアクセスが良く、自然がいっぱいあるというところ、地元の木をたくさん使ってきれいな校舎が残っていて、単学級で作られていた校舎だったというところで、選ばせてもらった。

市長：阿部知事は教育への思い入れが強い方で素晴らしいですよ。3期目が始まったら支持率 90%と新聞に出ていました。

教育長：つくば市は廃校が多いので、願望ですが、いずれつくばでも作ってほしいなと思っています。

中川氏：やらせていただけるならぜひというところですが、子どもが少なくなってきたところで、全校生徒 100 人くらいの単学級でとまっているところ

で、クラス替えがされず関係性が変わらないことを保護者が心配して統廃合が進むところが多いが、その前段階で3学年の異年齢グループでの学習活動にしておくとして1/3は毎年メンバーが変わっていき、関係性も変わっていき、2/3が1年間作ってきた文化を引き継いでいってくれるので、先生が4月に一生懸命クラスづくりしましょうということをしなくてよいのは、とても効果がある。縦割り活動をダメだという先生には出会ったことがないが、教科になった時に入れられないというのは、もったいないと思う。廃校になる前の少ない人数での複式学級になってしまわないレベルでできると面白いと思います。

市長：ちょうどその規模でしたが、先日廃校になりましたので、今は新しい学校をどれだけ良い学校にするかを皆で頑張っているところですが、要素として地域に学校がありますので、もう少し伺いたいのですが、一条校として、仮につくば市にその要素を入れていくとすると、今教職を持っている先生方のトレーニングというのはどうしているのでしょうか。

中川氏：内定者は決まりましたが、まだ公立学校等で働いている方がいるので、全員が集まる時間が毎日取れているわけではないのですが、インターネット上でzoom(web会議ソフト)などを使って月何回か集まって対話を繰り返し、最低月1回は必ず会って、カリキュラムなどの話をしています。一番大事なこととして、理念について対話を繰り返すことを行っています。オランダのイエナプランスクールを見たことがある人、ない人、オランダで3か月の教員養成プログラムを受けたりした人など状況がバラバラで、オランダが正解ではなく、日本のイエナプラン教育をどう熟成していくかが課題で、対話が一番の基礎となるので、かなり多くしゃべっています。イエナプランの特徴として、いろいろなことから広く学び続けるということがあるので、ストレンクスファインダーの強みの話やマルチプルインテリジェンスの話など、いろいろなものを基礎情報としてみんなで学んでいくということを行っています。

市長：オランダの研修は何語でやるのですか。

様式第1号

中川氏：英語と日本語です。日本語はリヒテルズさんが通訳してくださいます。

オランダ人は多くの方が英語を話せるので、基本は英語です。

市長：行った先生方は英語が話せる方ということですね。

中川氏：そうでない方も行きました。英語を話せると学校に2週間滞在したりする時に子どもたちや先生と直接話せるので、英語が話せる人と話せない人のペアで見学していたと聞いています。

市長：新しい学校では何人採用ですか。

中川氏：教職員（校長、教頭を含む）は12名です。

市長：公立学校の先生もいるのですね。

中川氏：公立で働いている先生もいます。

小野村委員：オランダのイエナプラン教育のDVDを見ていて、1学級30人くらいで教師は1学級2人が原則なのですか。

中川氏：1学級1人が原則です。二人というのは、オランダは働き方がだいぶ違うので、月火水はA先生、木金はB先生が担任になるということが起きうる環境なので、そういう意味で2人となっていると思います。

小野村委員：女性が一人いて、男性がアシストで入っているシーンがあったが、保護者の方か何かですか。

中川氏：保護者の場合もありますし、援助が必要な子に対しては、日本と同じようにサポートとして入る国の支援もあります。

小野村委員：私も不登校の子どもたちが中心なのですが、その学びの場の運営にかかわっています。環境以外はイエナとかなり近い趣旨だと思っていますが、やっぱり難しいですよ。日本でも子ども中心といいながら、子どもに重いランドセルを持たせて通わせるなど、全然子ども目線になっていない。宿題を出すにしても、一人の先生が1時間ずつ宿題を出して5教科で5時間、そんなに家でできないというところに気づいていなかったりして、子ども中心と言いながら、子どもを見るという基本的なことができていない人が

ほとんどだと思う。研修が非常に難しいと思うのですが、日本においてもオランダと同じくらいの割合で普及すればいいと思っているのか、全部の学校に多少なりともイエナの考えが影響を与えられるようにと考えているのか、そのあたりいかがですか。

中川氏：個人的な考えですが、オルタナティブ教育に興味を持った理由は選択肢が日本にはないというところで、私も私立で育っていますが、大体が一斉型でそこまで特殊な教育でもなかった。自立の一步が選択であり、自由につながっていくことだと思うのですが、学び方を選択できないという日本の教育制度の中でどうしたらそれができるのだろうというところから入っています。制度として公設民営学校がいかにしてできるかというところで、学び方の選択肢を増やすという意味で活動をしてきました。

小野村委員：日本の教室を使うと 30 人だとイエナプランでは狭くないですか。

中川氏：私もそう思っていたのですが、オランダの教室を測ってくれた人がいて、日本の方が広がったのです。どのように机と椅子を置くかで、黒板はなく、必ずサークルになれる場所を確保する。プロジェクターは使うが、前がどこかは必要ないというところでやっています。

柳瀬委員：全部移住ではないということでしたが、地元の子どもたち、地元の先生で希望はあるのですか。

中川氏：地元の子どもたちも大歓迎ですが、佐久穂町もこの間統廃合して、大きい学校をつくったばかりのところですので、うまく一緒にやっていきたいと思っています。選択の自由を拒むことはありません。

柳瀬委員：私学助成金などマネジメントで難しい部分があるかと思いますが、入学料がどうしても高くなるなどはありますか。

中川氏：苦しいが、ハイソな人達ばかりに来てほしい学校ではないというところは理事の間でも意見は一致していて、小学校の私立平均以下の年間 42 万円程度の学費で考えています。そのためにも子どもが来ないと回らないので、頑

張らなければいけないところです。

市長：思ったより安いですね。鈴木さん、いかがですか。

鈴木委員：ビデオを見た感想ですが、特別なことを何か言っているようには全く感じなく、自分もこういう学校で学びたかったなという学校なので、あとはこれを公立学校にどうおろしていくのか。完全にイエナでやっていくという選択肢もあるし、理念だけを取り入れるのかが気になっています。取り入れるとなると、現場の先生方もこれをいいと思ってくれないと実現できないところなので、そこら辺までも考えながらやっていかなければいけないなと思っています。

中川氏：理念を体現するためにはどうしたらいいかをイエナプランの人たちが研究してできたものが、サークル対話やブロックアワーなどだと思うので、理念だけ掲げて中身が違うものになるのは一番もったいないと思います。リヒテルズ直子さんは、間違えずに伝える義務があるとおっしゃっていて、誰が何を言ったのかがとても大事で、リヒテルズ直子さんが語ってきたことに意味があり、それを守るための協会での活動でもあると思います。日本ではイエナプランという名前を一部使ってイエナ的なことをやっていますとなってしまう可能性があるが、誤解を恐れずに極端なことを言うと、イエナプランという名前は実はどうでもよくて、コンセプトが大事にされて体現されているかどうか重要だと思います。

市長：我々が注意しなければいけないのは、素敵なものがあるからと背景も考えずにやろうとするとうまくいくわけがないです。教育長が言っている「社会力」はイエナプランと重なりがあると思っています。どうすれば、当たり前のことを当たり前に行えるようになるのかを我々は努力していく必要があると思います。イエナプランをつくば市の柱にしますと高く掲げるという話ではなく、そこから生かせるものを外さずにやるということで、つまみ食いでは薄っぺらなものになるので、骨太の中に「社会力」という概念はすでにあるので、

どう学びながらやっていけばよいかなど。ただ、実験校で一つくらいあると面白いとは思いますが。

中川氏：実験校や研究校でやることを文科省の方にも薦められていて、複式学級、個の学びと協同の学びがキーになってくると思っていて、プロジェクト学習など教科横断的なところもすべて新学習指導要領にあり、齟齬がないと思っています。研究校などで御協力できる部分はあると思います。

倉田委員：教育理念は、その方向で進むべきだと思うのですが、当たり前といえば当たりの当然の考え方だと私も思います。規模が違う公立学校で同じ方向性を目指して、どう進んでいけばいいか、つくばプランではないが、独自性を出すことが重要ではないか。これならば実現可能だということを模索していく必要があると思います。イエナプランを完全に実践することは不可能だと思うので、地区の実情に合わせたものを作り上げていくことも私は大切だと思います。地域が応援体制でやっていける方向に流れていくことが大切だと思っています。社会力も地域があって学校がコーディネーターになってやっていく体制づくりが大切だと思っています、教育目標達成のための地域行事などを創造、発展していくことが必要だと思います。現役の時はやっていましたが、子どもたちは企画、運営も一緒になって作りあげる参画型にしないといけないと思います。

中川氏：20の原則を当たりのことと言ってもらえて嬉しい。抽象度が高く、多くの方がいいよね、そのとおりだねと思ってくださるものですが、原則1にある「誰もが尊重されるべき存在で、人はみんなかけがえのない存在である」というところをみんなそのとおりだと思うけれども、嫌いな人がいないかという、いて、その人に対して嫌な当たりをしていいのかということ、そうではないよねというところに立ち返る場所としてあると思います。イエナプランでなくてもいいというよりは、大きな理念を共感できるのであれば、体現されるものについては、地域にある「本物」の場所から何かを学んでいくということな

ので、わざわざつくばプランなど別のものにしなくてもよいかと思います。イエナも土地の名前で、イエナ大学の先生が提唱して、イエナという名前を使ってというのではなく、ペーターペーターゼンはイエナプランという名前が嫌だと言っていたくらいなので、言語化されていてそこに立ち戻れることの方が大事。これに則ってつくば市で学校実践した時に、こうつながってくるよねということを現場の先生たちが試行錯誤していくことで、つくばのイエナプランが深まっていくということではないかと思います。私は無理ではないと思っていますのですが、3つくらいある学校教育目標が知・育・体に沿ったようなものではなく、校長が出している学校経営目標の意味などをみんなで話して形作っていくような研修や時間をしっかりと取るなど丁寧なことができれば実現可能だと思っています。一番の目的は、例えば、人格の形成とは何なのかを先生たちが各々の価値観で語り、みんな違う価値だと思った時に「私たちはどうする？」と考え、先生たちがコミュニティを作っていく経験を通して、学校も地域も作っていくということではないかと思いません。泥臭く先生方とともに大きな理念を掲げて向かっていくということではないかと思いません。

柳瀬委員：全くそのとおりだと思っていて、イエナプランはグローバリズムでもなく、ローカリズムでもなく、ドメスティックだと思っています。家庭的なものの延長で構築しているので、普遍性があると思う。私はオルタナティブスクールでシュタイナー教育を勉強していたのですが、深く立ち入ると独特の人間観が日本にうまく根付くだろうかというところがあったが、それとはまた違って、普遍性があるのがイエナプランだと感じました。異学年混合クラスなどイエナプランとしてこれだけは譲れないという形は、何ですか。

中川氏：譲れないというよりは、日本で一番ハードルが高いと思われるのが異年齢だろうと思います。対話の重視や個の学びと協同の学びは非常に重要だと思うので、これが守られていけばというところがあるかと思っています。

柳瀬委員：異年齢は譲るのですか。

中川氏：異年齢は、すごく効果があることで自然なことなので、実は譲りたくない。ただ、オランダのイエナプランの先生に聞いた時に、異年齢学級にしてしまえば、みんな同時に同じことを教えればいいという概念から先生の考えが変わらざるを得ないので、先生のアプローチも頭の改革もされるのでいいという言い方をしていました。そもそも人間は多様であり、一学年の中で見てもみんな違うという前提に大人が立てれば、異年齢でなくても理念を大切にすることはできる、と言っていました。ただ、この島国の中で、みんな同じ存在と思うことが美德とされる部分がある中で、一学年の中でクラスを作った時に、みんな違うという前提に本当の意味で立てるかは、なかなか難しいところがあるので、少人数になった複式学級などでエビデンスを出すことも必要かと思いません。

小野村委員：イエナプランについて勉強して、シュタイナーの本をもう一度読んでいて、私たちが忘れてきたのは well-being、「子どもたちが安心して学び、夢や希望を育むことの大切さ」 だと思った。日韓米中で日本の自己評価が低いという異様な数字を思い出して、自分が今までデータをないがしろにしていたと改めて思いました。子どもたちが将来に夢や希望を持てることと言っていました。子どもが楽しく学校に行ければ、黙っていたって勉強してくる。背骨が曲がるようなランドセルを持たせて学校に通わせてきた。テストをして子どもが間違っていることを否定して、こうしなさいと指導してきたのが今の学校の、私自身がやってきたことであって、自己肯定感が下がるのは当たり前。今後つくば市で取り組む時には、肯定感が高まるような教育の一つの参考としてイエナプランを導入していくべきなのかなと思いました。

中川氏：オルタナティブ教育というと何か心頭している人というように見られることがあるが、イエナプランのいいところは多くから広く学んでいくというところで、私は共感ができた。心頭していくことを求めているわけではないということが、共感ができたところでした。メソッドではないという言い方をし

ているが、広まるには時間がかかるかもしれないが、本当に良いものと皆さんが思ってやっっていけば、やれるのではないかと思います。

市長：今の話は大事な部分で、子どもは幸せではないから今のままでは駄目だろうとみんな思っていると思う。倉田委員の自分たちで考えて作っていくことや鈴木委員のお子さんの置き勉の話で提案をしてもはじかれてしまうような学校では、自己肯定感が上がるチャンスを失ってしまう。学びのチャンスや自己肯定感を高めるチャンスが転がっているにもかかわらず、ファシリテーターである先生がどこまで関わられるかだと思います。イエナプランの場合、バランス感が非常にいいように感じるのですが、自分たちの運営に対してどういう関わりがあるのでしょうか。

中川氏：バランス感というところで、非常によくできていると私も思っています。共に生きることを学ぶ学校というところがキーとしてあり、自由の相互承認のためにどう生きるかが難しいところで、自己のことを知る、他者のことを知る、世界を知ると大きく3つあると思う。大事なところは、自分の学びに責任を持つということで、なぜこれを学んでいるのか、これができるようになること次これができるようになるから学んでいるなど「自分の学びは自分のもの」ということだと思います。協同の学びを通して他者とともに生きていくことを学ぶということで、そのために学校全体が自分たちの第2の家としてあり、教室はリビングルームとしてみんなに心地の良い場所となるのかということ。対話と遊びと学習（仕事）と催し（お祝い、学んだことの共有）という4つのサイクルの中で、先生が全て教え与え決めてしまうということではなく、先生は先生としてあるが、同じ人間として関わっているというところだと思うので、本当の意味で民主的に人としてみんな扱われます。逆に、全部子どもたちのみに決めさせる、というのは不自然だと思います。

柳瀬委員：異学年で物事を決めるときには、下の子の立場、上の子の立場で決めていく。「学校の庭」という論文を書いた先生がいるが、学校の庭をどうす

るかというときに行政が先生で、上級生と下級生のニーズが違う。モナド論だと思っていて、日本の学校はシステム論なので、先生たちもどうしようもなく思考できない状況になっている。クラスが一つの家庭であり、単位を小さくしていくことで、システムから抜け出すことをしてあげたいと思う。

市長： 2000 人を超える大規模校があり、それをいきなり 100 人の学校にはできないが、中川さんの目線からアプローチがありますか。

中川氏：賛否両論あると思いますが、異年齢学級と単学級どちらもあってよいのではないかと思います。異年齢で学びたい人たちは、仮にイエナコースのようなものがあってもできるのではないかと思います。みんながみんなイエナのやり方に合うかという、また変な話だと思う。大規模校はそこにトライできるのではないかと考えています。

市長：オランダの場合は親がイエナプランで連れてくることが多いのですか。

中川氏：シュタイナー、モンテッソーリなどいろいろな学校が近所にあって、そこから選べるという状況にあり、オランダの仕組みとしてそうなっている。オルタナティブ教育の国の教育に対する役割があり、ワールドオリエンテーションはオランダの学習指導要領にも入っている。数%の教育がやっていることの影響は認められれば、そこが取り入れられるというところがあるので、全員にそれを合わせましょうという、また逆の動きになっていくと思うので、一部希望する人たちが選べるような環境があることは大事だと思います。

市長：一条校ということで、テキストブックはどのようにされていますか。

中川氏：教科書は使わなければいけないので使います。自立的に自分の学びをどう進めるかは自分で決められますが、教員から今週はこれをあなたは学ばなければいけないというものが出されて、自分で計画を立てていきます。全てを先生が教え与えなければいけないとなると時間がなくなりますが、子どもは自分で教科書を読めば学ぶことができ、教科書は大変よくできている良質な教材なので、そういう意味で使っていくことになります。それが網羅できて、子ど

## 様式第1号

もがきちんと学んでいるかはチェックしなければいけないと思っています。

市長：教育局長の視点から聞いておきたいことはありませんか。

教育局長：今の日本の公教育の仕組みの中で、イエナプランがどうなるのかと  
いつも頭の中にあるものだったので、今の話を伺ってできる部分がたくさんあ  
ると思いました。自分で担任している時は、子どもたちに考えさせたい、決め  
させたい、気づかせたい、そして私はそれをコーディネートしたいという思い  
でやっていたので、普通の教育でも理念次第なのかなという思いもありま  
す。

中川氏：ワールドオリエンテーションだけ校内研究として異年齢でやっている  
公立学校もありますし、公立の先生方でブロックアワー、個別学習の部分を切  
り取って国語と算数に入れている方もいます。やってみると本当の意味での自  
立的な学びや自ら考える場面はよくあり、リヒテルズさんもよく言いますが、  
アクティブラーニングはおしゃべりしたり、動きをしたりするだけではなく、  
脳が活発に動いていることなのだということを良く言われます。公立学校の中  
でトライしている先生は結構いらっしゃるということはお伝えしておきたい  
です。

教育局長：つくばでは「つくばスタイル科」という総合的な学習の発展系があ  
るのですが、異年齢でもすぐできて、今の考え方でやるともっといいものがで  
きるかと思います。

市長：他にいかがですか。よろしいですか。いきなりすいませんでした。

ちなみに今日はどうしてこちらにお越しになったのでしょうか。

中川氏：オランダに視察に行かれる際に連絡をいただいていた、つくば市何か  
おもしろいことを考えているらしいとなって、ホームページでもイエナプラン  
と書かれていたので、行かないわけにはいかないということでまいりました。

市長：本当にありがとうございました。

会議をまとめますと、9月27日にインターナショナルスクールオブアジア軽

## 様式第1号

井沢の小林りん氏をお招きして、ディスカッションができればと思っています。取組や理念を聞いた上で、つくばの教育にどういかせるかを考えていきたいと思います。11月には、私と教育長、教育局長、毛塚副市長でオランダに行き、イエナプランを見てきますので、その後に報告したいと考えています。市としてテクノロジーについても、教育との関係、アプローチを整理しておく必要があると思っています。校長会やPTAとの意見交換も必要だと思っていますので、机上の空論ではなく、現場の声を聴きながら、キャッチボールしてつくばの大綱を作っていきたいと思っています。その他何かございますか。

【呼ぶ声なし】

市長：ないようですので、事務局に進行を戻します。

事務局：長時間に渡り御協議いただき、ありがとうございました。これをもちまして、平成30年度第4回つくば市総合教育会議を終了いたします。

以上。

# 平成30年度第4回つくば市総合教育会議次第

日時：平成30年9月4日（火）12時00分～

場所：5階庁議室

1 開会

2 市長挨拶

3 講演 《12時00分～12時45分》

講師：小宮山 利恵子 氏

（株式会社リクルートマーケティングパートナーズ

リクルート次世代教育研究院長）

講演題目：人工知能（AI）時代の学び

～諸外国におけるテクノロジー活用現況について～

4 講演を受けてのディスカッション 《12時45分～13時15分》

5 協議事項

教育大綱の方針について（イエナプラン教育）

《13時15分～14時00分》

6 閉会

事務局：総務部総務課

：教育局教育総務課

◇◆第4回総合教育会議までの対応事項◆◇

教育総務課

番号	項目	調査・確認の方法	資料	出典・根拠
1	小中一貫校開設時の教育委員会議事録の確認 (何を課題として捉え、小中一貫教育を進めたのか)	つくば市教育委員会会議事録により調査	【資料No.1, 2】 「つくば市における小中一貫教育」	つくば市教育委員会会議事録
2	春日が施設一体型となった理由	同上のほか、施設整備に向けた基本計画等により調査	【資料No.1, 2】 「つくば市における小中一貫教育」	『(仮称)春日小中学校建設基本計画策定業務報告書』(H20.3)
3	教師の自己肯定感について、正確な数値を調査	OECD国際教員指導環境調査(TALIS)2013年調査結果報告に、教員の自己効力感、教員の仕事への満足度に関する項目あり	【資料No.3, 5】 「教員環境の国際比較」	OECD国際教員指導環境調査(TALIS)2013年調査結果
4	筑波東中学校アンケートを確認	秀峰筑波義務教育学校にアンケート結果が保存されているか問い合わせ、内容を確認	【資料No.4】 平成25～27年度実施分のアンケート結果のデータが保存されていたが、年度により質問項目や結果のまとめ方が異なっており、単純に同項目の3年分の比較を行うことはできないことが判明。このため、必要な項目のみ抜き出し作成	筑波東中学校 「学校評価アンケート」
5	先生が多忙な理由のデータ(調査結果等)の確認	OECD国際教員指導環境調査(TALIS)2013年調査結果報告に、教員の自己効力感、教員の仕事の時間配分に関する項目あり	【資料No.3, 5】 「教員環境の国際比較」	OECD国際教員指導環境調査(TALIS)2013年調査結果
6	児童・生徒の意識調査結果(学校が楽しいか等)の確認	内閣府がH26.2に実施した小学生・中学生の意識に関する調査に学校生活に関する項目あり	【資料No.6】 「小学生・中学生の意識に関する調査」	『小学生・中学生の意識に関する調査報告書』 H26.7内閣府

## 【つくば市における小中一貫教育】

平成 19 年、学校教育法が改正され、義務教育課程における小学校過程を基礎、中学校課程を基礎の上に立つ普通教育という位置づけにし、小中学校の連続性の確保を重視し、発達段階に応じた指導を重要視した形で法が整備された。

これを受けて、以前から中学 1 年生と小学 5・6 年生の連携が重要であると考えていた当時の教育長は、「9 年間を通した円滑な普通教育を実施する法整備が出来た」として、つくば市における小中一貫教育を推進することを考えたものと思われる。

小中一貫の推進については、平成 19 年 10 月の定例教育員会において課内協議が始まったことが述べられ、平成 20 年 7 月定例教育委員会には「つくば市の教育の現状と目指す学校について」という報告が上がっている。翌 8 月定例教育委員会では、「つくば市の目指す学校（小中一貫教育）について」として議案を提出、承認を受けている。また、平成 20 年 12 月定例教育委員会において、つくば市の学校教育の在り方として小中一貫教育を推進していくことが述べられ、春日学園をモデル校として施設一体型一貫教育校として新設するとしている。なお、この際に反対意見等は出されておらず、議論はなされていない。

実践としては、平成 20 年度から吾妻中学区、21 年度から並木中学区・高崎中学区、22 年度から筑波西中学区、23 年度からは竹園東中学区・桜中学区で小中連携をスタートさせた。併せて、平成 22 年から 24 年にかけて、つくば市小中一貫教育推進委員会が開催され、小中一貫教育推進のために必要な事項の調査・検証を行った。

24 年度には、施設一体型小中一貫校である春日学園を開校、それに伴って市内全学校での小中一貫教育を実施。同時に、文部科学省から「特別な教育課程」に申請（平成 23 年 8 月定例会報告第 10 号）し、認定を受け、9 年間で連続して系統的な学び「つくばスタイル科」を創設したほか、小中の交流授業や ICT の活用などの施策を行った。平成 21 年 6 月定例会では、小中一貫教育を盛り込んだ学校教育指導方針が提出され、教育委員会として目指すものとして掲げられた。

### 【春日学園における施設一体型一貫教育校の経緯】

春日小・中学校は、TX 沿線開発に伴い、吾妻小・葛城小・吾妻中・手代木中において、平成 19 年から平成 20 年にかけて児童生徒の増加が見込まれたこと（平成 16 年つくば市学区審議会の答申、『(仮称)春日小中学校建設基本計画策定業務 報告書』（平成 20 年 3 月）、14 頁より抜粋）から、児童生徒急増への対応として計画された。

『(仮称)春日小中学校建設基本計画策定業務 報告書』（平成 20 年 3 月）によれば、春日小・中学校は、小中一貫教育の推進という観点から、施設一体型一貫校のモデルとして設定された。PTA 役員、小中学校教職員、学校評議員、区長・自治会長を対象としたアンケート結果では、施設共有に対し、消極的な意見は全体の 7%程度と、反対する声は少なかったようである。

## 教員環境の国際比較

TALIS2013年調査結果報告

### 【教員の自己効力感】

項目	日本	参加国平均
<b>1 学級運営についての自己効力感</b>		
学級内の秩序を乱す行動を抑える	52.7	87.0
自分が生徒にどのような態度・行動を期待しているか明確に示す	53.0	91.3
生徒を教室の決まりに従わせる	48.8	89.4
秩序を乱す又は騒々しい生徒を落ち付かせる	49.9	84.8
<b>2 教科指導についての自己効力感</b>		
生徒のために発問を工夫する	42.8	87.4
多様な評価方法を活用する	26.7	81.9
生徒がわからない時には、別の説明の仕方を工夫する	54.2	92.0
様々な指導方法を用いて授業を行う	43.6	77.4
<b>3 生徒の主体的学習参加の促進についての自己効力感</b>		
生徒に勉強ができると自信を持たせる	17.6	85.8
生徒が学習の価値を見いだせるよう手助けする	26.0	80.7
勉強にあまり関心を示さない生徒に動機付けをする	21.9	70.0
生徒の批判的思考を促す	15.6	80.3

### 【学級の規律的雰囲気】

項目	日本	参加国平均
授業を始める際、生徒が静かになるまでかなり長い時間待たなければならない	14.7	28.8
この学級の生徒は良好な学習の雰囲気を創り出そうとしている	80.6	70.5
生徒が授業を妨害するため、多くの時間が失われてしまう	9.3	29.5
教室内はとても騒々しい	13.3	25.6

### 【分析結果】

学級運営、教科指導、生徒の主体的学習の促進のいずれの側面においても、高い自己効力感を持つ教師の割合は、他の参加国に比べ日本では低い。

日本の教員の中では、学級運営と教科指導について高い自己効力感を持つ割合は比較的高いが、生徒の主体的学習参加を促進することにおいて自己効力感の高い教員は16%から26%と特に少ない。

## 教員環境の国際比較

TALIS2013年調査結果報告

### 【教員の仕事への満足度】

項目	日本	参加国平均
<b>1 現在の職務状況や職場環境への満足度</b>		
可能なら、別の学校に異動したい	30.3	21.2
現在の学校での仕事を楽しんでいる	78.1	89.7
自分の学校を良い職場だと人に勧めることができる	62.2	84.0
現在の学校での自分の仕事の成果に満足している	50.5	92.6
全体としてみれば、この仕事に満足している	85.1	91.2
<b>2 職業としての教職への満足度</b>		
教員であることは、悪いことより、良いことの方が明らかに多い	74.4	77.4
もう一度仕事を選べるとしたら、また教員になりたい	58.1	77.6
教員になったことを後悔している	7.0	9.5
他の職業を選択した方が良かったのではないかと思っている	23.3	31.6
教職は社会的に高く評価されていると思う	28.1	30.9

### 【分析結果】

現在の職務状況や職場環境について、参加国平均を下回る傾向があるもののほとんどの項目で半分を優に超える教員が満足していることが示されている。80%近く又はそれ以上の教員が

①現在の学校での仕事を楽しんでいる(78.1%)

②全体としてみれば、この仕事に満足している(85.1%) と回答しているが、

「現在の学校での自分の仕事の成果に満足している」と回答した日本の教員の割合は50.5%にとどまり、参加国平均の92.6%を大きく下回る。

## 教員環境の国際比較

TALIS2013年調査結果報告

### 【教員の仕事の時間配分】

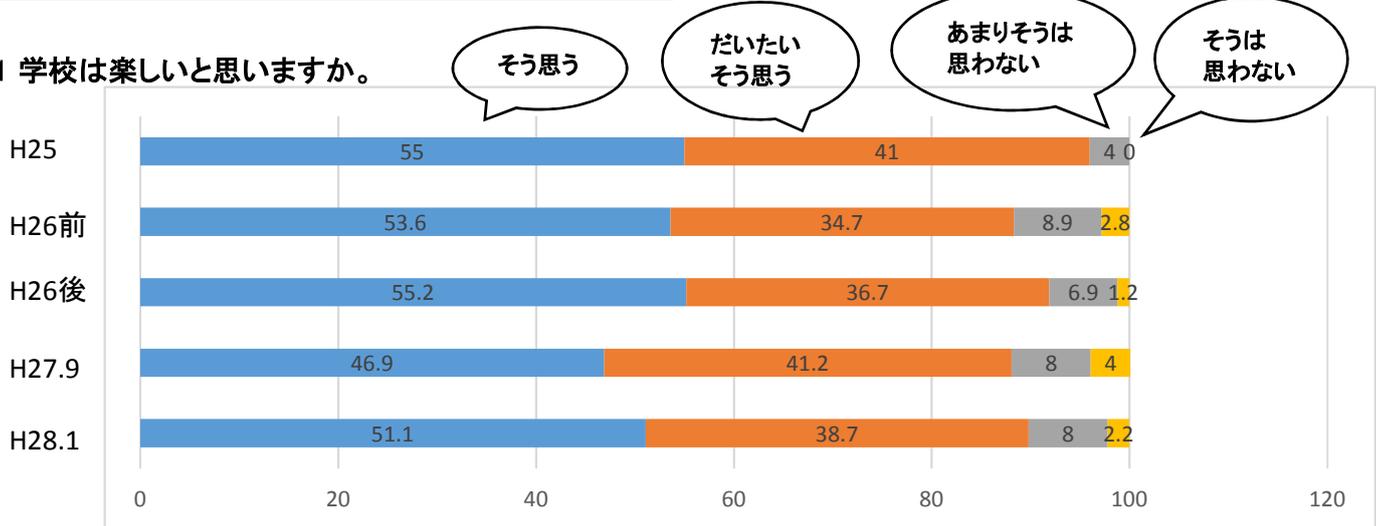
項目	日本	参加国平均
仕事時間の合計	53.9	38.3
指導(授業)に使った時間	17.7	19.3
学校内外で個人で行う授業の計画や準備に使った時間	8.7	7.1
学校内での同僚との共同作業や話し合いに使った時間	3.9	2.9
生徒の課題の採点や添削に使った時間	4.6	4.9
生徒に対する教育相談に使った時間	2.7	2.2
学校運營業務への参画に使った時間	3.0	1.6
一般的事務業務に使った時間	5.5	2.9
保護者との連絡や連携に使った時間	1.3	1.6
課外活動の指導に使った時間	7.7	2.1
その他の業務に使った時間	2.9	2.0

### 【分析結果】

直近の「通常の一週間」における仕事時間の合計は、参加国平均の38.3時間に対して、日本では53.9時間であり、参加国で最も長い。日本の53.9時間からチリの29.2時間まで大きな幅がある。

\* 筑波東中学校学校評価アンケート(対象:全生徒)

1 学校は楽しいと思いますか。

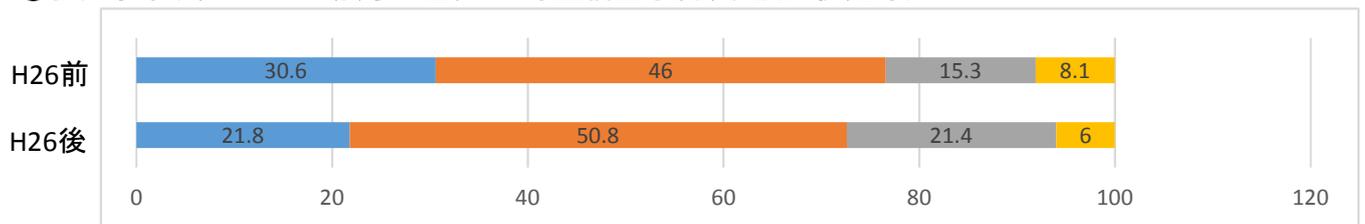


2 つくば紫峰学園(小中一貫教育)としての取組みは充実していると思いますか。(H26年度調査)

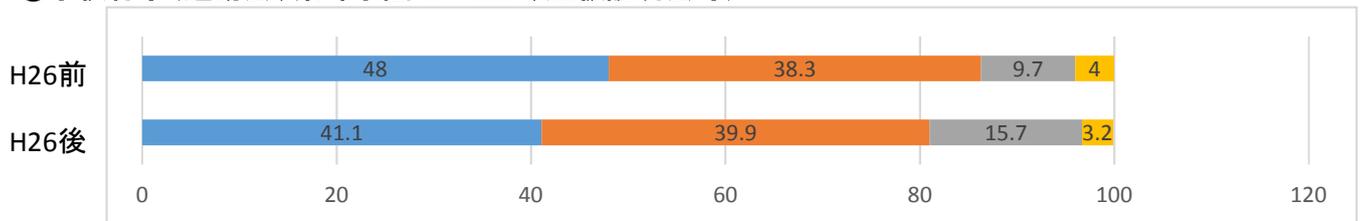
①学習活動(テレビ会議・学びの広場等)



②合同事業(あいさつ運動、歩く会、5・6年生宿泊学習、筑波山検定等)

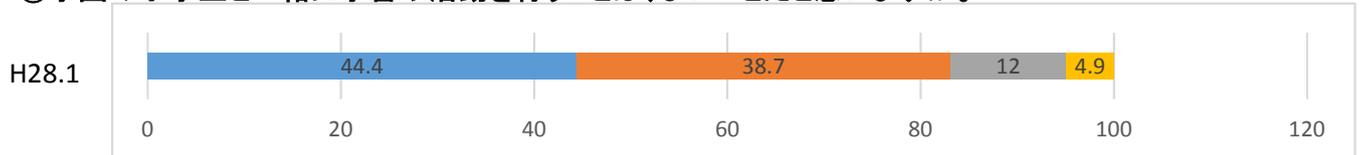


③学校行事(運動会、紫峰学園のつどい、進級説明会等)

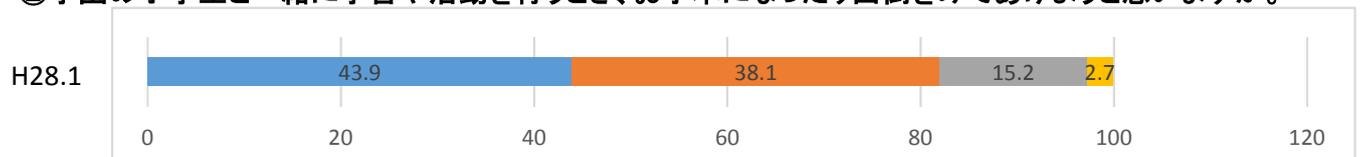


3 小中一貫教育(H27年度後期のみ)

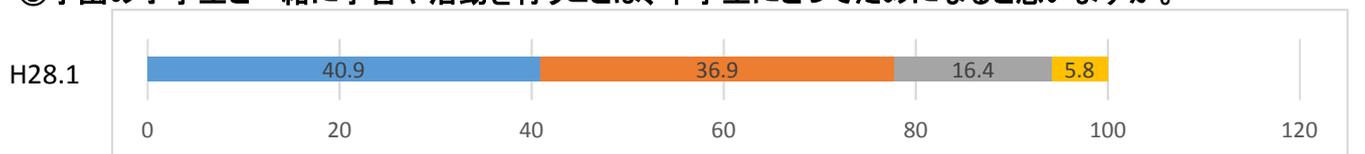
①学園の小学生と一緒に学習や活動を行うことは、よいことだと思いますか。



②学園の小学生と一緒に学習や活動を行うとき、お手本になったり面倒をみてあげようと思いますか。



③学園の小学生と一緒に学習や活動を行うことは、中学生にとってためになると思いますか。



\* 筑波東中学校学校評価アンケート(対象:保護者)

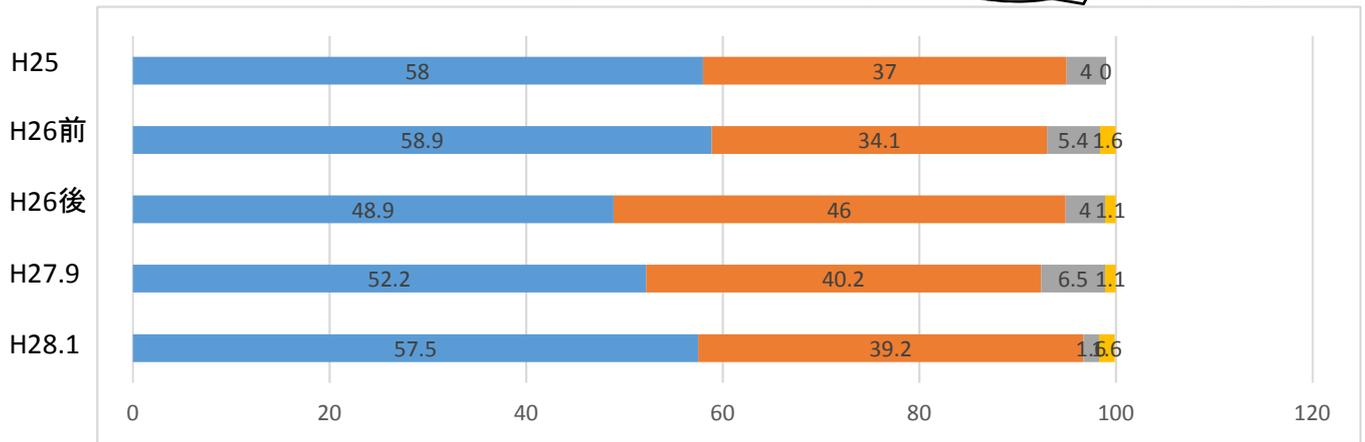
1 お子さんは楽しく学校に通っていますか。

そう思う

だいたい  
そう思う

あまりそうは  
思わない

そうは  
思わない



2 つくば紫峰学園(小中一貫教育)としての取組みは充実していると思いますか。(H26年度調査)

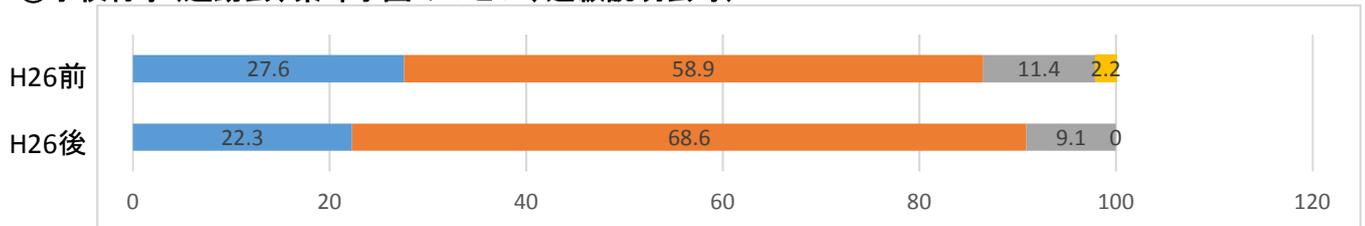
①学習活動(テレビ会議・学びの広場等)



②合同事業(あいさつ運動、歩く会、5・6年生宿泊学習、筑波山検定等)



③学校行事(運動会、紫峰学園のつどい、進級説明会等)



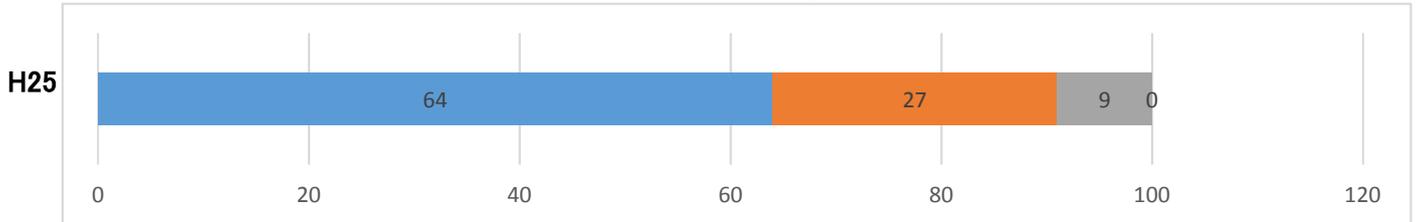
## \* 筑波東中学校学校評価アンケート(対象:教職員)

(質問項目が平成26年度以降は変わってしまうため、次の調査結果は平成25年度分のみ)

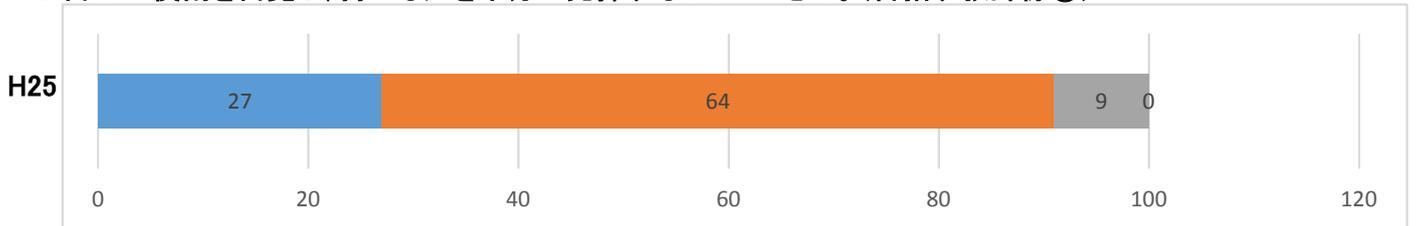
### IV本校教育目標の達成状況



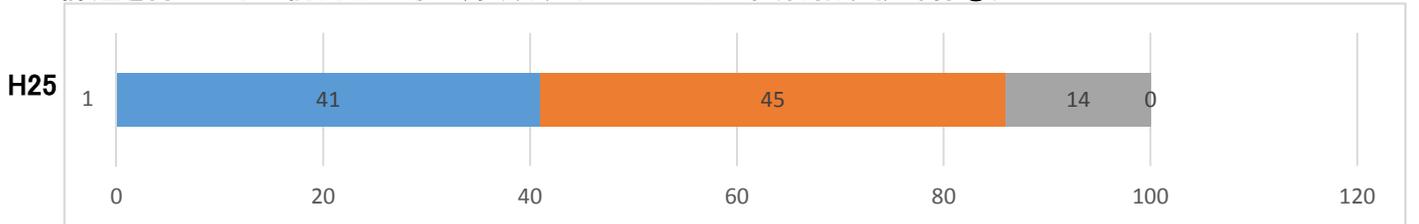
#### 1 生徒のことを最優先に考えることができた。(目指す教師像①)



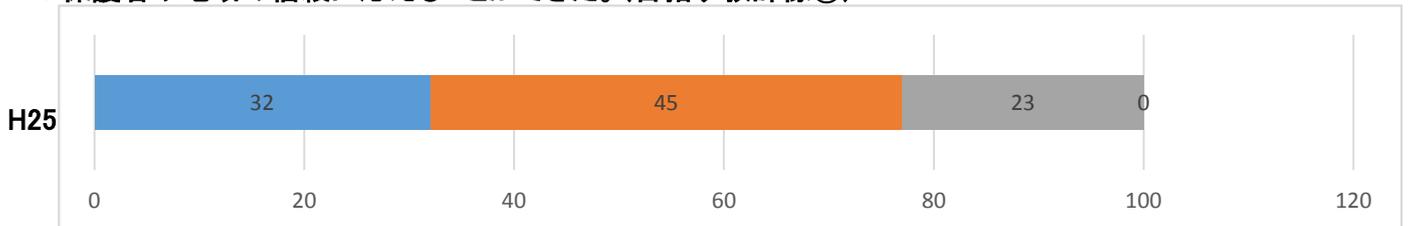
#### 2 自己の役割を自覚し、持てる力を十分に発揮することができた。(目指す教師像②)



#### 3 課題を持って常に前向きに考え、実践することができた。(目指す教師像③)



#### 4 保護者や地域の信頼に応えることができた。(目指す教師像④)



# 小学生・中学生の意識に関する調査

平成26年7月 内閣府

## 1 青少年（小・中学生）を対象とする調査の結果

### 1 学校生活

項目	あてはまる	まああてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない	あてはまる(計)	あてはまらない(計)
学校の授業がよくわかっている	47.9	44.4	6.3	1.4	92.3	7.7
先生との関係がうまくいっている	56.5	36.0	5.9	1.6	92.5	7.5
友達との関係がうまくいっている	81.3	16.2	2.2	0.3	97.5	2.5

### 2 学校生活の楽しさ

項目	楽しい	まあ楽しい	あまり楽しくない	楽しくない	楽しい(計)	楽しくない(計)
学校生活の楽しさ	80.6	16.2	2.8	0.5	96.8	3.3

### 3 価値観

項目	そう思う	どちらかという とそう思う	どちらかという とそう思わない	そう思わない	そう思う (計)	そう思わない (計)
人の役に立つ人間になりたい	75.6	21.9	1.9	0.6	97.5	2.5
勇気のある人間になりたい	70.7	26.8	1.9	0.6	97.5	2.5
人は信用できないと思う	3.3	15.5	35.7	45.5	18.8	81.2
自分の気持ちに正直に生きている	37.0	49.9	11.6	1.4	86.9	13.0
自分が満足していれば人がなんと 言うときにならない	11.1	25.7	37.3	25.9	36.8	63.2
将来のためにも、今、頑張りたいと思う	72.2	22.5	4.3	0.9	94.7	5.2
今が楽しければよいと思う	26.5	32.8	28.8	11.9	59.3	40.7
友達から人気のある子になりたい	29.1	39.7	23.6	7.5	68.8	31.1
勉強のできる子になりたい	65.7	26.4	5.8	2.1	92.1	7.9
人といると疲れる	2.5	10.1	28.3	59.0	12.6	87.3

# 小学生・中学生の意識に関する調査

平成26年7月 内閣府

## II 保護者を対象とする調査の結果

### 1 教育で重視すること

項目	父	母
基礎学力をつけること	65.8	72.5
友達と仲良く過ごせること	60.9	69.9
礼儀・規律や心の持ち方を学ぶこと	62.1	54.6
考える力や創造力・表現力をつけること	57.5	47.2
音楽・芸術・スポーツや自然体験・社会体験など幅広く学ぶこと	21.5	25.8
安全で安心して勉強できること	10.8	16.6
希望の学校に入れる力をつけること	6.8	6.5

### 2 学校教育の満足度

項目	満足	まあ満足	やや不満	不満	無回答
通っている学校の教育にどのくらい満足しているか	13.1	65.9	17.0	3.8	0.2

### 3 子育てや教育の問題点

項目	父	母
テレビやインターネットなどのメディアなどから、子どもたちが悪い影響を受けること	55.8	50.0
親の収入や職業などによって、受けられる教育の機会や質に差があること	47.7	37.3
家庭でのしつけや教育が不十分であること	46.7	59.9
地域社会で子どもが安全に生活できなくなっていること	43.3	58.3
子どもたちの遊び場が少ないこと	38.6	38.9
教師の教育する力が不十分であること	33.2	44.2
世の中全般の風俗が乱れていること	25.0	44.8
地域社会と子どもたちのかかわりが乏しいこと	19.6	24.1
教師と生徒の接触が乏しいこと	18.5	22.5
受験競争が厳しいこと	18.1	22.1
子どもたちの生活が勉強に偏りがちなこと	16.5	18.1
教師の数が少ないこと	16.4	17.1
学校で考えることが多過ぎること	6.6	6.1
学校の規則が厳しすぎること	2.7	2.5
その他	5.7	4.5
特に問題とすべきことはない	1.9	0.4